

小説
恐怖

岡田八千代著



093466-000-2

特13-64

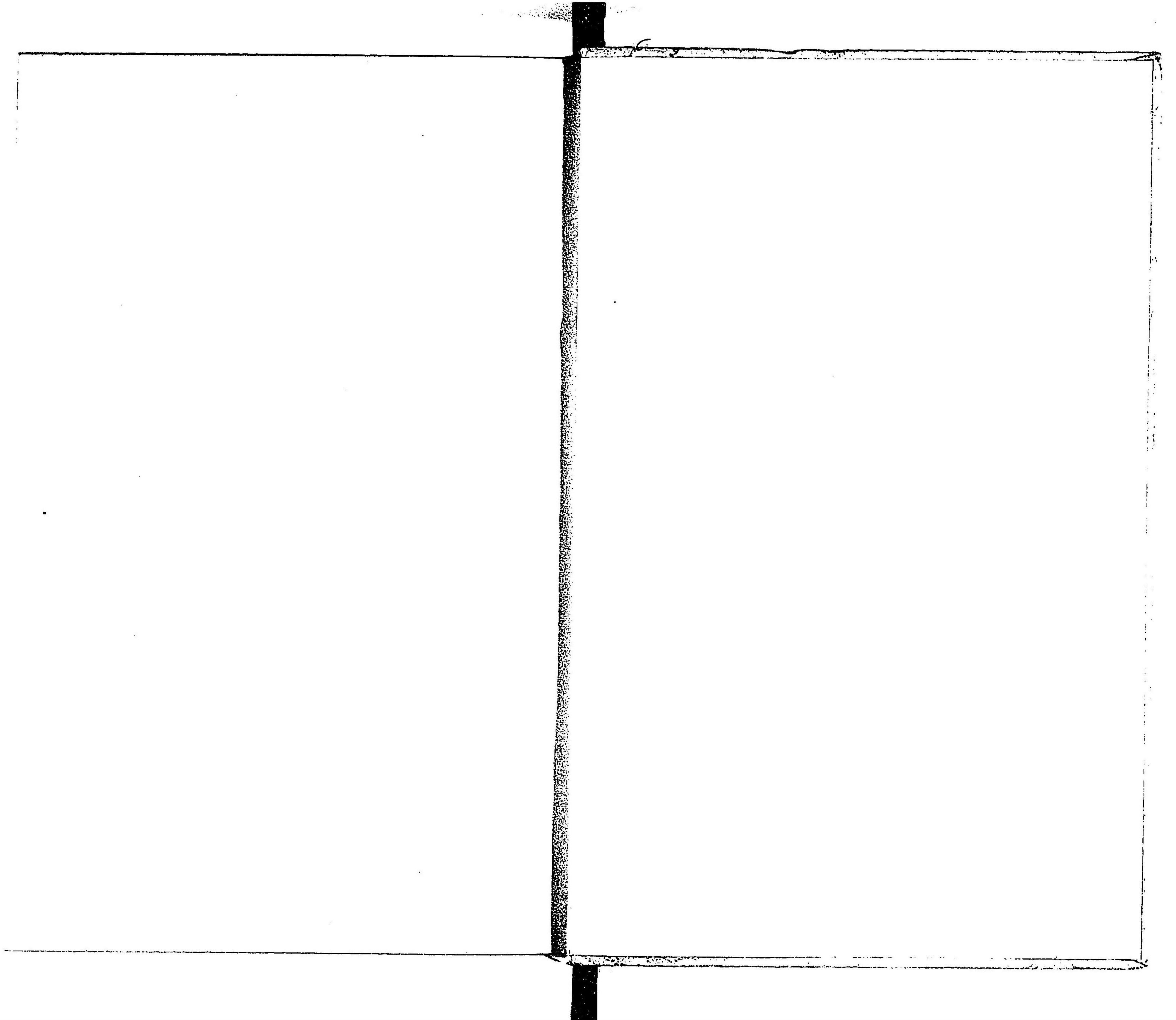
恐怖

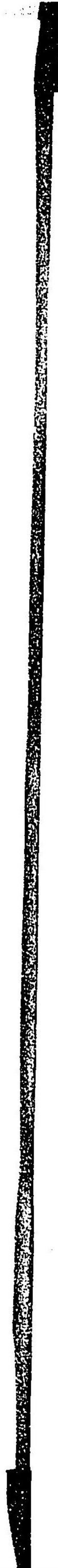
岡田 八千代/著

M42

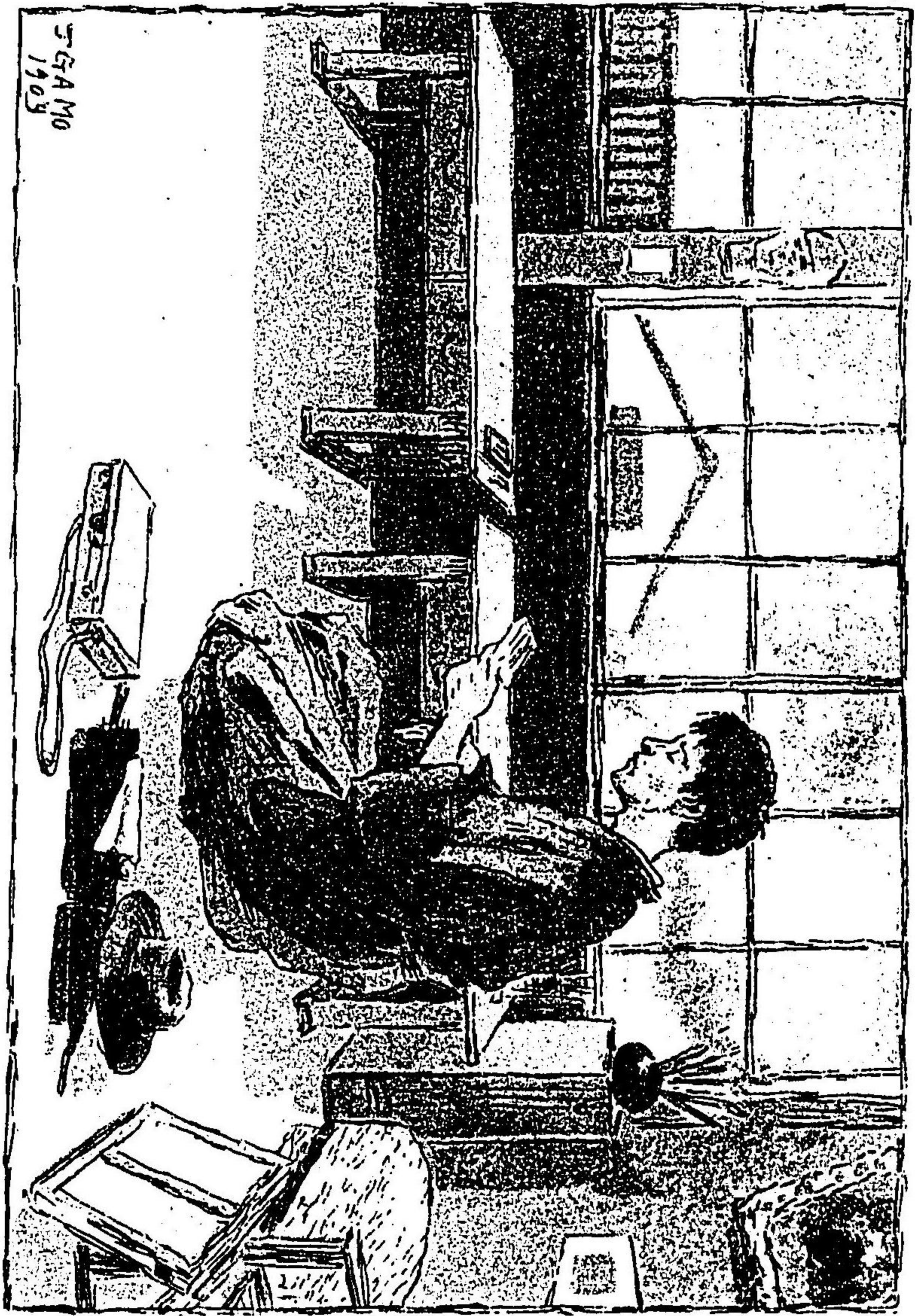
DBQ-0837







54AM0
1903



持13
64

恐怖



國津要助は油畫を器用に描いた、或年の白馬會に出品した『菜の花畑』と言ふのなほ、最も衆人の眼を惹いて、秀才よ、天才よと言ふ賞賛の言葉は、雨のやうにその人の肩に降りかゝつた。然し今では其生死の程を知つたものも少ない。要助の生れは水戸とのみ聞いた。始めて彼が此道に志したのは、

岡田八千代



まだ肩上げの深い筒袖の頃である。日光の某旅館の主人は彼の叔父に當つた。某年某夏此宿の宿帳に美術學校教授と言ふ肩書ある紳士の名が記された時。主人は忙しく、其甥の許に急使を立てた。かねて要助が執心の學校の名を情深い叔父は忘れなかつた。使に連れられて來た要助は、這入ると其儘宿帳を覗き込んだ、紳士の名は戸田麻彦と記されてあつた、聞えた洋畫の大家である。さうなつては引き合はして貰ふ間も遅緩しく、折節宿の男に畫布を擔がせて山に這入つたと言ふ戸田の後を追つた、要助が空に描いて居つた人よりも戸田はずつと優しかつた。肥えて品の好い體格、分別ありげに美しく禿げた頭、笑ふ度に失る象のやうな眼、

今更に要助は懐しく思はれた。殊に見事な筆運び、美しい畫具の色、要助の總身は嬉しさにふる／＼と震へた。

やがて夕食の後に要助は怖々叔父の背後に付いて戸田の前へ出た。袴を窄いたと言ふのみで眼付の落付かぬ妙に縮けた、夫で居て言葉遣ひの粗末な、田舎丸出しの少年であつた、一目見て戸田は笑つた。都慣れた人の眼に此少年の様子は、とんと宮城野の前へ引き出されたしのぶの見得のやうに思はれた。

「誠に不束な奴ではございますが、何分先生のお引立を持ちまして、どうぞ物になりますやうに……」

3 旅館の主人は紺屋と畫家と同じものゝやうに考へて居た。道を踏

んで修業さへすれば必ず「物になる」ものと思つて居た。

戸田は猶笑つて居た。主人は要助に言ひつけて、幾枚かの水彩畫を出さして見せた。蟬もある、土瓶もある、花もある、景色もある、師に就かぬ筆運びは、法には習はなかつたらうが物は皆釣合ひが取れて居た。

戸田はやゝ眞面目に要助と畫とを見比べた、實力のある弟子を持つ事は、疾より此人の望む處であつた。其時主人は要助を退けて斯う言つた。

「彼奴もゆく／＼は手前共の娘に配せやうと存じますで、身許其他の處も悉く引受けますから、どうぞ何分御力添を……尤も

先生様のお宅へお置き下さらんでもな、相當の處へお聲掛り下さりましたら、當人は何處へでも喜んで参りませうで……」

畫伯は眞面目に考へて置かうと言つた。
其夜要助の耳には名高い此處の川瀬の音も入らなかつた。夢には話しに聞いた東京の町の學校の有様。切角買った畫具を悉皆汽車の中で奪られたと見て膽を冷した。

旅館の娘の名はお京と言つた。

一一

お京は東京生れの母親に似て、さしやな可愛らしい十四の娘であ

つた。其頃もう學校を止めて裁縫の稽古に通つて居た。優しい母の仕付に言葉も訛らず。爪はづれも尋常に無口な子であつた。要助は此子が縫つて呉れたきやらこの紋付羽織を後生大事に着て其秋の事、戸田から迎の手紙を懐中して、おづ／＼と叔父の尻に付いて上京した。

恐しく忙しない町を彼方此方と案内され乍ら、廻町の戸田の家に着いた時、彼は其書室の狭込しいのに驚いた。四邊の壁には大小色々の額を、掛け連ね、まだ其上に掛け切れぬ書は、座敷の隅々を占領してやう／＼僅かに開いた處へテーブルを置いて、幾つか椅子を並べてあつた。

こそぐられるやうに其椅子へ腰を掛けた時、茶を持って出た女に付いてぞろ／＼と五匹の飼猫が要助の足を嗅ぎ廻つた。

要助は女の見る目も構はずぶる／＼と震へ上つた。有名な猫好きな戸田は五匹を抱へて大聲に笑つた。叔父は恐縮する、要助は赤くなつた。其夜は叔父の宿に寝て、翌日戸田の紹介状を持つて尋ねた家は芝の窪町を右へ這入つて元堀端の三階造りの額縁屋であつた。

磊落の額縁屋の主人に委細を頼むと、叔父はホク／＼して日光へ歸つて行つた。心細い、淋しい心地も、三日四日の中に少しは薄らぐと、折々水戸訛りを笑はれ乍らも土地の様子を聞いて見る

勇氣も出て来た。

額縁屋の主人は藤堂と言つた。小作りの身の引締つた前額の禿げた口髭のピンとした男で常時賢しさを眼をニコ／＼と笑はして居た。

要助の居る場處に定められた處は、頂上の三階の、だ／＼ッ廣い室の一隅で、其處には、要助の外に三四人の荷物が置いてあつた。昔から此室からは有名な人物を出した、何れも畫家か彫刻家である。着いた夜、夫等の人の話を此處に居る先輩から聞いた時、要助の胸は又しても踊つた。

主人は若い時に外國へも行き、苦勞をもし抜いた男であつた。

義侠心に富んだ腹の大きい面白い人で、學資の無い者、食料の續かぬ者など、何れも主人の商賣の手助けをさせて貰ひ乍ら勉強をして居る。

程なく要助は研究所へ通ふ様になつた。研究所と言ふのは白馬會と言つて、溜池にあつた。入會の日交際の爲に菓子を買つて行くのは此會の古くからの習慣であつた。要助が五十銭の餅菓子を抱へて教場へ這入ると、無遠慮な先生は其處此處で勝手な批評をする、隠し藝を出せと言ふので震へ／＼追分を歌はせられた。翌日行つて見ると、一方の壁に大きな白紙を貼つて、誰が言ひ傳へたか、要助が五匹の猫に驚いて腰を抜かして居る處が描いてあ

藤堂の三階に同居した先輩は三人あつた。一人は野口と言つて彫刻を學ぶ人、後の二人は同じ洋畫で、一方を田崎、一方を中尾と言つた。三人ともに、最早美術學校に通つて居た。

三

藤堂の店の正面には大きな鏡が置いてあつた。狭い店もその爲にやゝ廣く見えた、左側に机を据ゑて椅子に掛けて居るのはいつも息子の藤郎で、客の注文を細かに雜記に控える間には、見覚え聞き覺えに泥を捏ねては、新しい額縁の圖案をしてる事もあつ

た。右側の板敷には奥へ入れられぬやうな大きな額縁やら、此店に深い關係を持つてゐる名ある畫家の油畫などがゴク／＼と置いてあつた、母屋の階下は額縁に金箔を置く所、庭は縁の形を取る所になつて居た、二階は主人の居間で、死んだ藤郎の母は、能く此處で夜になると清元を語つた。

要助の机の据ゑてある三階の上り口は店にあつて、主人の居間からは北に當つて居る。室の北側の天井は寫眞屋風に硝子を張つて光線取りにしてあつた、月の明るい夜、風の暴れる日などには、氣安かつた國の生活を思ひ出して、よく要助は女のやうな涙を零した。さう云ふ時いつも野口と田崎とは友達の戀話しをし合つて

は笑ひ興じて居た、中尾は夜半の鐘を聞き乍らも書筆に噛み付いて稽古に勉めて居た。

野口と言ふのは、加賀の金澤生れだと言ふ。ネチ／＼と養えきらぬ女のやうな男で、常に養父の金澤氣質を罵る癖に、小説家の泉鏡花は己の國から出たと自慢して、人は天才でなくて何が出来、學校なんか當になるものかと言つて始終ぶら／＼して、あらゆる所の令嬢達と能く交際つて居た。

要助が此人の口から度々聞いたのは、天才と言ふ言葉の外に理想と言ふ言葉であつた、書にも彫刻にも皆理想を含んで居らねばならぬ意味が無ければならぬと言ひ聞かされた。

『君、金色夜叉つて小説を読んだ事があるから。』

野口は或日要助に聞いた。

『私？小説なんてものはまだ知ません。』
と要助は尻上りに答へた。

『だつて君にも言號があると言ふぢやないか。』

野口は嘲けるやうに言つて片脇の田崎を見返つた、要助は赤くなつたが目を反らして、

『そんな事アしりません。』

『知らない事があるもんか、しかもお京さんて言ふんだつてね、名からして小説的さ、そして又頗る美人ぢやないか。』

斯う言つた田崎は其時腹這ひになつて煙草を吹かして居た。

「だつて僕は………」

と狼狽へる要助を野口は尻目に見て、

「驚いたでせう？ あんな大事なものをも機の引出しなんかに入とくもんぢやないよ君。」

二人は聲を合して笑つた。

要助は東京の學生の不遠慮なのに驚いて終つた。

田崎は平氣で、

「君、怒つたかい？ 大事の寫眞を拜見したんで怒つたの？」
「なわに怒りやしません。」

「だつて大切なんだらう？」

「否、あれは叔父が入れて行つたので私は知らなかつたんですか
ら。」

「何もさう君、言譯をするにや及ばないよ全く大切なら大切と言
ひ給へな。」

「けれども………」

と要助が泣きさうになつたのを見て、二人は又聲を合して笑つ
た。

四

要助は其日一日齧ぎ込んで居た、夜に入つて田崎は琴平亭の何やらを開きに行くと言つて出掛けた。秋雨のしとくと降る日で、暮れてからは若い者の聲も消えて、一しほもの淋しかつた宵である、要助は七時を聞くと頭が痛むからと言つて床の中へ這入つて終つた、野口は夫でも薄暗い洋燈の許でしよんぼりと土を拵つて居たが、モグ／＼と寝返りばかり打つ要助を見ては、折々何か言ひ度げに唾を呑んで居た、こんな事が半時も續いたらう、何と思つたか、野口も土を其儘にして要助の側へ床を敷き始めた。正直に着替へた身體を静かに床へ潜り込んだ時、要助はスル／＼とその

夜着を抜け出した。

「君、何處へ行くの。」

「僕？ 餘り眠れないから本でも讀まうと思つて。」

「さうかい……………」

續けて何か言ふかと、要助は單の寢間着に肌寒いのを堪えて立つて居たが、野口は何も言はなかつた。

「洋燈を借りますよ。」

要助は取るものを取つて來ると、洋燈を引き寄せて又床へ這入つた。

「國津君。」

野口は又顔を出して聲を掛ける。

「何ですか。」

「君、怒つてるかい？」

「どうしていす？」

要助は一旦開けた本を又伏せて言つた。本の表紙には被紙をして大きく夫へ「藝苑雜稿」と書いてあつた。

「最前餘り失敬な事を言つたからさ」

「失敬な事とは？」

「お京さんの事さ。」

要助は新らしく胸を轟かした。又その事を言はれるのかと思ふ

と、もう顔がクワツクとする。

「なアに……………」

と言つて本を取り上げたが、猶耳は澄して居た。

「だつて、あれから酷く酔いでるやうだから。」

「なアに……………頭が少し痛かつたもんですから……………」

「さうか、然し田崎君が餘り何だもんだから遂僕まで誘はれちや

つて、本當に君氣に掛けずに呉れ給へよ。」

「なアに、あんな事は氣になんか掛けやしません……………」

机の引出しなどを開ては困ると言ふ事迄は、要助に言へなかつ

「寫眞だつて君、決して僕が先達で見たんぢやないからね、田崎君は、全くさう言ふ事が好きなんだから、油断が出来ないんだよ。女の話つて言と直ぐ口を出して焼くんだからね。今迄にも君、自分の友人の女なんかと怪しくなつた事は幾度だか知れないんだ、だから、君だつてうつかかりしてると馬鹿を見るせ。」

田舎育ちの要助には返事も出来なかつた。野口は猶話しつづけ

て、

「けれどもねえ君、君は全くお京さんて人の養子になるのかい？」

「そんな事は僕全く知らないんですから………」

「けれどもねえ君」

と野口は急に力を入れて、

「養子ばかりは止給へよ。」

此時階段を上つて来たのは田崎だつた。二人の話はその爲に折られて、夜半過ぐるまで田崎は野口を相手に寄席の噂で持切て居た。中尾は其夜歸らなかつた。

五

中尾の留守は三晩續いた。四日目の朝の事、田崎がぼんやり目を覺ますと、外には誰も居ない筈な室の一隅に、五十號の畫布に向つて向ふさまに端然と座つてゐるのは何日の間にか歸つて来た中

尾らしい、延びた髪も梳らず、僅か見ぬ間に廣い肩も骨立つて見えた。

『中尾君。』

呼び掛けて置いて振り向いた顔を見ると、今に見ろ歸つて來たらさん、油を絞つてやると言つて居た勢も何處へやら。

『今朝歸つたのか？』

と言つた儘こそくと顔を洗ひに下りて終つた。野口も中尾を見ると恐ろしいもの、やうに音も立てず床を疊んで出てゆく。終りに國津が目を覺ました時、中尾は其大きな身體を屈めて畫具箱を掻き廻して居た。

『あ、お歸りでしたか。』

懐かしげに聲を掛けると、つと振り仰いだが目元にニツと微笑んで深く傾向いた。

『その畫を描いて居られたんですか。』

國津が肩越しに覗き込むと、中尾は少し身を寄せたが矢張無言に傾向いたばかり。

畫布の中には未だ炭畫の儘乍ら、節くれだつた半裸體の大男が、如何さまにも勞れ果てたやうに捨石に腰を下して居る處が寫してあつた。

主人が此時上つて來た。

『どうした描けたかい？』

『いや、存外難しくて……………』

と言ひ乍ら中尾は畫布の後から綿のはみ出た座蒲團を主人の足許に持ち出して、

『御座んなさい。』

『あゝ、有難う、うむ、なか／＼面白い、手本も好ささうぢやな
るか。』

『え……………手本は割合に好いのがありましたけれども、實に色が難しくて、三晩て言ふもの、立ちづめて見てましたけれども、見ている中は彼の色だと思つて居ても、畫になつていざ筆を取るとなる

と全で駄目なんです。先づ魅せられて終ふ傾きがあるんですね、實に好い色なんです、實際のはね、けれども到底も手に負へないからまア一度目を休めてからと思つて歸りました。』

ふだんは無口な中尾が畫の事になると人の違つたやうに話すのに國津は驚いて居た。主人は、

『はう？然し勉強も好いが三晩も續けて夜明しは毒だ。しかも表だらう？尙悪い、そして一體後はどんな處になるの？』

『向ふに夜明の空を描きましたね、此邊に青物を積んだ車を描かうと思ふんです。』

と中尾は畫布の處々に木炭で印をつけた。

「ふーむ？私には分らんが、一まづ構造が出来たら一度誰か先生に見て貰はにや損だよ。而うして君のやうに、さう詰めて勉強して病氣にでもなつて御覽、何にもなりやせんよ。まア今日は一日ゆつくり休んで夫から又始めたまへ。」

「なアに、大丈夫です。飯でも食つたらまた行つて来ませう。手本も待つてませうから。」

「手本なんざ賃錢さへやつて損を掛けにや夫で好いのだ。まア今日は休み給へ。」

「いや、さうも行きません、損徳ばかりでは動きませんから。」

「夫はさうでもあらうけれども、まア君の顔色を見給へ、決して

普通ぢやない。身體を悪くしちや何にもならん。」

主人は其儘下りて行つた。中尾はちつと考へ込んで居た。

國津は中尾の熱心な言葉に聞き惚れて居た。

六

其頃の美術學校撰科の入學試験は秋にあつた。國津も戸田の指圖に任せて、些と大膽乍ら其秋の試験に出る事にした。

木炭を入れた細長い箱、夫を消す食麵包、能く切れる小刀、夫等を包んだ紛悦の包を懐中して藤堂の店を出た時は、又今迄にな

い恐れを感じた。上野の森を突き切つて學校の門を這入つた時は

我しらず足が震へた、門内の右手に松の木のおつたのも、左手に
 椎や椿の植つて居たのも、氣が付いたのは通學を始めてからであ
 った。其時は只教へられた儘右へ折れて下駄箱の並んだ玄関を上
 つて生徒控へ室へ飛び込んだ、氣の小さい國津には其處に居た人
 々の顔がぼつとして見えた。

間もなく氣にして居た鐘が鳴ると胸が冷たくなつた。廊下傳ひ
 に試験場に這入ると其處には丸顔の助教がにこ／＼して人々を
 迎へて呉れた。

籤引で位置を極めさせられる間も國津は殆ど夢中であつた。教
 授から渡された木炭用紙をカルトンに留めて書架の上に置いた時、

やう／＼目の前の希臘時代の立像の石膏も明かになつて、始めて
 目の覺めたやうな心地がした。寂とした教場に紙の上を走る木炭
 の音が絶間なくさら／＼と聞えた。何處からともなく木犀の香が
 搖ぐ空気に折ふしばつと薫つて、隣地の音樂學校のピアノが聞き
 なれぬ耳には、只かしましく響いた。

首尾よく夫にも及第した。しかも衆中第四位を占めて居たのは
 國津が叔父へ報告の手紙にも殊さら大きく書いてあつた。

夫から一年間と言ふもの、倦きもせず能く石膏を寫生した。火
 曜と金曜に戸田教授は其教室を見廻つて、手酷い批評に生徒を泣
 かせもし、又笑はせもした。

國津は尙白馬會へも夜學に通つて必死と勉強した。

丁度國津が上京してから二年目の春である。思ひがけず日光の叔父はお京を連れて藤堂を尋ねた、叔父の髪には白髪も見えずお京は美しく成人した。

「ほう、お前も肩上げを下したかい？、お京もな、今度は東京見物と言ふ計りでなく、私も東京で勉強したいとせがむからの、些と遅蒔ぢやあらうけれど、何處か學校へ入れて、後々お前の爲めになるやうと思つて出かけて來ました。其積りでお前も聞き合はせて貰ひ度い。」

叔父の決心は固かつた。風紀の悪い女學生仲間に入れ、あた

ら無邪氣な少女を世の風に揉ませるでもあるまいと、心で危み乍ら夫丈を言ふ意氣地が、未要助には無かつた。

間もなくお京は或る牛込邊の女學校に寄宿した。袴を新調する、リボンを買ふ。叔父は一人やきもきと氣を揉み乍ら歸つて行つた。一しきり噂の絶えて居たお京は、夫から又、屢々田崎や野口の口の端に掛つた。

中尾は其頃生國の生野へ歸つて居た。

七

要助とお京とは父親に言ひ付けられた通り始めの中こそ端書の

遣り取りもして居たが、やがては要助から出すばかりで、一月も
 する中にお京からの便りはフツと絶えて終つた。氣を揉み抜いて
 要助が出した手紙の三度目の日曜に、お京は珍らしく藤堂の家を
 訪ねた。居るかも知れませんが上つて御覽なさいと言はれて昇
 つた三階には生憎田崎が居つた。歸ると言ふのを無理に留めて、
 もう戻る筈ゆえ待つて呉れ。かね／＼若し訪ねて來たら待たせて
 置くやうにと言はれて居るのだからと、言はれて見れば逢つて一
 言言つて置きたい事もあり、つい、もの優しい田崎の言葉に引き
 つけられて其儘其處に落着いて終つた。

要助はなかく歸つて來なかつた。よもやに引かされて待つ中

田崎は物靜かに色々要助を噂した。品行に就ては友人故何も言ふ
 まら。只其技量に就ては折々忠告し度いと思ふ事もあるが、なかな
 か國津君は彼で我が強いから僕等の言ふ事は用ひませんよ。と無
 邪氣さうに、笑つて見せて、其處へ行つては貴女は言號の事でもあ
 り、するからどうか邪道に踏み込まぬ様に導いてお上げなさい。決
 して腕の無い人ぢやありませんから。彼あ言ふ人は先が樂しきで
 す。殊に國津君には貴女と言ふ人があるし、僕の様な孤獨と違ひま
 すからと、煙草も吸まらずしんみりと淋しさを身に染めてまじめ顔
 に親切に言つて呉れた。話の中に幾度か田崎は言號々々と言つた。
 其度にお京は顔を赤くした、やがて田崎の言葉が切れて、暫く

兩人は無言にさし向つて居たが、いつても付かぬ時分にお京は、
 『私……別に要さんと言號つて譯ちやありませんから……』
 と言つた。

『え？國津君とですか。』

田崎は驚いたやうに眼を見張る。

『え！』

と言つてお京は又ぼつとした頬を反向けた。

『然し、國津君の話ぢや、公けにさう極つてるやうなんですよ。
 さう言つちやア失禮ですが、貴女の寫真なんかも肌身離さず持つ
 て居ますし、今度の展覽會には貴女の肖像を描くなんて言つて居

ますよ、夫を聞いて可笑いんです、店の誰か、ぢやア其畫の題
 は言號としろなんてね、評判です。』

『まア……夫ではお店の方までそんな事を？……』

『え、知らないものはありやアしません、尤も、僕丈は未だ如
 何か分らんものを、餘り噂をするな、男は夫でも構はないが、女
 は若しさもない噂を立てられちや一生の損だからつて、此間も堅
 く口留めをしたんです。』

『まア……』

35
 お京は傾向いた。よもやあれ程氣の少さい要助に、夫まで大膽
 な腹がわらうとは思はれぬもの、側に居る友人が眞面目に斯う

言ふのに、まさか嘘のあらう筈もなし、お京の小さい胸は辱しさに浪を打つた。

御母さんは私にさうは言ひ聞かさなかつた、要助に見込が付けばお前の婿にするかも知れぬ、けれ共之ばかりは親の定められる事でもなし、殊に繪師と言へば道樂者も多いと言ふから、うつかり人の口に騙されな。

若し東京へ出て之はと見込んだ人があつたら、遠慮なく私へまて言つて遣せ、悪くは計らぬ、短氣な事は必ずすまい。とくれくれも言ひきかされた。

御父様も別に要助はお前の良人だとは言はなかつた。要も大分

に見込があるさうな、兄貴と思つて何事も相談せよ。畫師だとして腕さへしつかりして居たら食ひはぐるものではないと言つた丈であつた。

夫を勝手に男の方から言號だなど、極めるとは何と言ふ失禮な事、隔ての無いのにも程がある。例へ女なりとも心の自由はあると言ふのに。

八

お京は最早都の風に其肌を曝されて居た。

『……………決して要さんとは言號なんぞぢやありませんのよ。』

お京は思ひきつたやうにきつぱりと言ひ放つた。

「へえ？」

と田崎は驚いたやうに言つて、清らかな其顔をお京の側へ近々と寄せた。

「夫ぢやア貴女が可哀さうだ。」

と吐息を吐く。

「ですから私も困つて終つて……………」

「如何してですか。」

お京は田崎の抑揚たくみな言葉にすつかり載せられて終つた。

「あの人ね……………」

「うむ……………」

「……………」

「貴女に妙な事でも言ひましたか？」

此時田崎の眼はお京の顔をひしと射た。

「いゝえ……………別に妙な事ぢやありませんけれども……………餘り度々手紙や端書を呉れるもんですから、寄宿の方が種々に御仰つて……………私困るんですもの。」

「然し言號からのだつて言へば好いちやありませんか。」

「だつて、そんな事を……………」

と田崎を見上げた眼には涙が浮んで居た。

「ぢや、實際さうぢやないんですか？」

「まだ疑つて入らして？……」

お京の聲は有るかなしに響く。

「さうですか。然し國津君は最早ちやんと貴女の家跡を嗣ぐ氣で居ますからね。」

「夫や家の跡は取るかも知れませぬ共、私とは如何つて事はありやしません、夫だのに……種々な嫌な手紙なんか遣して……」

「へえ？……さうですか……然し國津君の口吻では何か深い……腹を立つちや不可ませぬよ。何か斯う深い關係でも

ゐるやうに言ふもんだから僕もさう信じて……」

「まア……如何しませう……」

お京は暫く諸手に其顔を押へたが、

「私誓ひますわ。」

と涙の下から言ひ放つ。

「さうですか、實に人は見かけに寄らんものですね、どうぞ僕の失言は許して下さい、ね、お京さん、僕は實際物の言ひ廻しの出來ない奴なんですから、腹を立つたら許して下さい、ね、ね？」

田崎はするくと膝を寄せて、

「ねえお京さん。」

言ひ様後を見返ると同時にツと右手を延ばしてお京の肩に置いた。

お京ははつとして身を退らせたが、片脇の國津の机の上に打伏して終つた。

田崎は其儘膝を堅くして座つて居た。やがて顔を上げたお京は、懐紙を延べて何かコツ／＼と書いて居たが、夫を盪むと國津の硯の下へ入れて、なほ田崎を後にした儘。

『あの、爰へ手紙を置きましたから、あの人が歸つたら上げて下さいませ。私はもう歸りますから……』
と震へ聲で言つた、田崎は沈んだ聲で、

『さうですか大變失禮しました。然し御立腹でお歸りでは困りますけれど……』

『いゝえ……』と傾向いた儘、

『……餘り種々の事言つて貴君こそお驚きになつたでせう……』

『なアに僕なんか……』

お京は何からぢ／＼して居たがやがてパイと立つて歸つて行つた。田崎はわざと見送りにも立たなかつた。

その日國津は夜に入つてから呆然と歸つて來た、其頃分けはじめた髪も塵埃を浴びて、例のキヤラコの紋付も白くなつて居た。

「如何したい、酷く呆然してるぢやないか、一體何處へ行つて來たんだ。」

珍らしく家に居た田崎が突然聲を掛けた。

「なアに、」

國津は幽かに苦笑ひした儘、肩から皮で釣つた畫の具箱を下してドカリと座る。

「なアにぢやないよ君、髪も着物もほごりだらけぢやないか、お増けに酷く酔いでさ、如何したんだい、喧嘩でもしたのかい、尤

も喧嘩をする柄でも無いが、おかしいねえ。」

「なアに詰らん事です。」

其儘、國津は伏目になつて畫具箱の蓋を開くと、パレットの畫具はまだ生々と濡れて居るのを、突然パレット小刀で削り始めた。兩眼には涙が溢れるやうに溜つてる。

「おい、如何したんだ、まだ夫やア用へるんぢやないか。」

國津は田崎の視線を避けやうとして、顔を反方向ける拍子に、一しづくはろりと落した。

之を見ると流石の田崎も口を黙んで終つた。其時階段の口から誰か國津の名を呼んだ。

『おーい、何だ誰だ。』

國津が出る迄も無く田崎がてれ隠しに立つて行つた。其處には夕飯後の口をもぐくさせ乍ら野口が立つて居た。

『國津君にね、飯。』

と言ひかけるのを押へるやうに田崎は止めて、二人とも階段の半まで下りたが、何か小聲に田崎が囁くと、野口は眼を丸くして

『フーム？如何したんだらう？』

『だから君、上手く釣り出して聞いて見給へ、夫から彼奴の机の上にお京さんが置いてつた手紙があるから後でそ言つて呉れ給へ、』

『お京さんの置手紙？何日だい？』

『今日さ。』

『今日？君一人の處へか？』

『さうさ、すべて僕の一人舞臺さ。』

『夫で君………』

といふのを冠せて、

『まアそんな事は後で話すから早く行つて、やり給へ、自殺でもし兼ねないぜ。』

『おどかしちや不可ないよ。』

『臆病だなア、ぢや僕は行つて来るからね』

『宿りがけか？』

「嘘言ぢやない、金儲けだ。」

「其積りで待つてるよ。」

「好いとも。」

其儘田崎は下りて行つた。分れて野口は階段を昇つたが、見れば國津は畫具箱から出したスケツチ板を洋燈の向へ立て、一心に眺めて居た。板には中景前景へかけて一面の菜の花畑、遠景に二三、杉の立木をわいらつた春の景色が寫してあつた。

「やア好いねえ、何處だいなは。」

言ひ乍ら野口は國津の側へ身を擦り寄せて座つた。

國津はハツとしたやうに野口を見たが、黙つて又畫を見返した。

「え？何處だいな？好い處だねえ。」

此時國津は何か決心したやうに野口の顔を見たが急に座を退つて、

「野口さん」

と、改まつて呼びかけた。野口はビクリとして國津を見たが、氣の無さうに、

「え、？」

と言つた儘尙向ふの畫に見惚れて居た。

「僕ウ改めて君に聞き度い事があるんですがねえ。」

と國津の聲はやゝ頼むやうに聞えた。

『何をさ。』

野口はまだ書を見た儘で言ふ。

十

『何をつて是非君に聞き度い事があるんだがなア。』
と國津は尙思ひ入つたやうに言ふ。

『どんな事さ。』

と野口が不承々々に此方を向くと。

『どんな事つて……別(べつ)の事でも無いんだけれども、君過日(きよじつ)養(やう)子(し)ばかりになつちや不可(い)ないと言(い)つた事(こと)がありましたね。』

『なにもなつちや不可(い)ないとは言(い)やしないけれども、まア成(な)らん方が好(こ)いとは思(おぼ)つてる』

言(い)ひ乍(さ)ら野口(のぐち)は袂(たもと)から敷島(敷島)を出(だ)して火(ひ)を付(つ)ける。

『どう言(い)ふ譯(わけ)なんだか一つ聞(き)かしてくれませんか。』

『然(しか)しね、僕(ぼく)がさうだから一般(いぱん)にさうだとは言(い)へないからね。』

『そんな事(こと)は構(かま)はないから何卒(どうぞ)話(はな)して下さい。』

『第一(だいいち)養子(やうし)つてもものは向(むか)ふの娘(むすめ)、君(きみ)で言(い)へばお京(きやう)さん——、まア言(い)譯(わけ)せず(ず)に聞(き)き給(たま)へ——左(さ)う言(い)ふ奴(やつ)から馬鹿(ばか)にされ(さ)れるね。』

『さむ、さうですか、夫(つま)から?』

51 『そしてさ、みすく馬鹿(ばか)にされ(さ)れて居(ゐ)乍(さ)らも誰(たれ)しも家(うち)の揉(も)めるの

52 は嫌だらう詰り我慢するのは養子の身分さ、殊に僕のやうに小さい時から養父の世話になつたものが、養父の思ふやうな事をしないで、お負けに自分勝手に這入つた學校を、自分勝手に止して終つたりするものは尙更馬鹿にされるものなのだ。」

「君は學校を止めたの？」

「遠からさ。」

「如何していす。」

「如何しても斯うしてもないんだ。少しばかり學科の成績が悪いからつて實技の方を一生懸命にやつてるものを落第させるなんてあんな學校は僕の理想ぢやないさ。」

「併し、實技が出来たら好きさうなものですけどねえ。」

「處が實技が出来ても學科で落す事があるんだからねえ。だから君、天才の出やう譯が無いのさ、失敬だけれ共、僕なんか三年の人が一週間かゝつてやる仕事でも、三日で易々やつて見せる、あんな下らない稽古を二度繰り返す勇氣が無いから止めたのさ、此家の大將なんか頻りに辛抱心が無いつて攻撃するけれ共ね、僕には猿の真似はして居られないんだ、夫や僕だつて學科の出来ないことは知つてるから、學科は再び繰り返しませう、けれども實技は三年のをやらして下さいつて願つたんだ、すると今迄そんな例が無いからと言ふんだ。もう君例の有る無しを言つてる時代ぢや

54 無いやね、到底も腦が違ふよ。」

『夫で家の方も失敗たつのですか。』

『なに、家を失敗たつのは今始まつた事ぢやないんだ。全體僕の養家の養父つてものは鑄物師なんだらう、僕も夫に仕立てる積りで金澤の工業學校に入れたんだけれども、嫌なもの嫌だからまア逃げるやうにして東京へ来て、學校へ這入るから學費を送つて呉れつて言つてやると學費は送らないと言ふんだ、然しね、之が全でかけ離れた事を勉強すると言ふ譯ぢやなし、彫刻と言へば縁のあるもんなんだから別に氣を損じる處もあるまいからつて、又頼んでやると斷然斷わると言ふんだ、夫から僕も丁度好いと思

つたから、夫なら僕の籍を返して僕を離縁して呉れつて言てやると、籍も返さない、學費も送れない、但しね、此地へ返つて來るなら今迄通り世話もしやうし好きなものも勉強させると言ふんだ、だつて君考へて見給へ、只さへ九尺二間と言つたやうな狭い土地に胸の悪くなるやうな下手な銅像がうぢや、立つてる處なんだ、そんな處に閉ぢ籠つて何が出来るもんか、夫でまア此家の大將の世話になつてるのさ。お負けに君養父の處の子供と言つたら、食ひしん坊で意地が悪くて、僕がした事と言ふと一から十迄養父に言付けるんだからね養父は怒る、娘は鼻で笑ふ。そんな事を堪へて迄其處の世話にならなくぢやならない譯はなし、僕はつくづく

56 養子の情けなさを感じたよ、まだ君、今になつてたつて離縁が欲しくは今迄の學費を辨償しろと言ふのさ、言語同断ぢやないか。

十一

野口は言葉を續けて、

「一概にさう言ふ家ばかりもあるまいけれども、兎に角養子なんてもものにはなるものぢやないさ。」

「ふ、馬鹿にされると言ふ處は確かにありますね。」
と國津は心から感服したやうに首を傾がせた。

「然し君のお京さんなんかそんな事はありません、僕の養父の處の娘なんざア堪らないんだからね。」

「……………」

國津は黙つて苦笑ひを洩らす。

「實際君、お京さんが君を馬鹿にしたなんて、そんな事があつた譯ぢや無からう？」

「そんな事はありやしません、又あつた處で別に僕は關係もなし……………」

國津は又俄かに顔を背向けた。

57 「だつて關係もなしつて言ふけれども、君とお京さんとは言號ぢ

『止してくれ給へ、僕アあんな失敬な墮落女は元から嫌ひなんだから。』

『如何したんだい君、僕にや少しも分りやしない。お京さんが如何かしたのかい？』

『如何も斯うもありやしない、實に君、僕は残念だ。』
國津が野口を見詰る目には又涙が溜る。

『如何したの、え君、話して見給へな、どんな事なんだか。夫とも僕には話せないのかい？』

『なアに、話せない事はないけれども又そんな事が田崎君の耳に

でも這入ると面倒ですからね。』

『断じて言はない、どんな事があらうと洩らしやアしないから話して見給へ。』

『ぢやア言ひますけれども………僕は今日中野の方へ寫生に行つたのです、すると思ひがけずお京さんに逢つたのです。』

『何時頃？』

『もう夕方でした、まださう遅くも無かつたんですけれども、此方へあんなまり遅く返るのも不可ないと思つて丁度繪具箱を片付けて居ると、直ぐ後の方で女の唱歌を唱つてる聲が聞えたんです、夫から何の氣もなしに振り返つて見ると夫がお京さんなんです、

60 連がありました、男の若い、教師のやうな奴でしたよ、然し僕は決して其男の事を彼是言ふんぢやない、けれ共君、實に失敬なんです、お京さんは僕の従妹の事でもあり又暫く逢はなかつたから國の様子を聞かうと思つて側へ行かうとすると、一寸會釋したまゝでずん／＼行つて終つたんでせう、そして少し行くと、其男が何とも言はれない高慢な顔をして振返つて見たんだ、お京は如何かつて言ふと何でも腹を抱へて笑つてるやうなんだ、僕は實に驚きましたね、國のやうな狭い土地でも何一ツ噂の無かつた女が、あゝも早く變るものかと思つて僕は本當に泣き度くなりました。もう墮落ですよ、墮落に極つてます。」

と國津は例に似合す唾吐くやうに言つて眉を寄せる。

「そりやア墮落で無いとも言へないけれ共、然し今日君の留守に此處へ尋ねて來たさうだからね。」

「嘘でせう、」

「嘘なもんか、其證據には置手紙があるさうだから見て見給へ、机の上とか言つたよ、其硯の下から出てるのがさうぢやないか、一寸見て見給へ。」

61 「まア好いですよ、どうせ陸な事を書いて行つたんぢやないでせう、手紙でも寄して呉るなつて言ふんでせう、誰が君、僕だつて叔父や叔母に頼まれてるから世話もしやうと言ふんです、少し顔

62 が如何かしてゐると思つて、僕が何とか思つてゐると思つたら大
間違ひさ、君誰が、あんな田舎女を相手にするもんですか、やが
ては犬にでも喰はれて死んでせうよ。」
と國津の勢はますます強い。

「けれ共一圖にさう思ふのも酷だよ、又如何言ふ事情が無いとも
言へない、まア手紙から先へ見給へよ。」

國津は氣強くは言つたもの、尋ねて来て手紙まで置いて行つた
と聞いて見れば、餘りに罵つたのが氣の毒のやうなり、又どん
な事が書いてあるかと恐しいやうでもある。
「まア見給へよ。」

又進められて餘儀なさうに夫を取り上げて見ると、宛名の肩
に「御懐しき」と書いてあるので又新らしく胸が轟く。

十一

手紙は國津の豫想意外冷やかに、又、酷しい言葉が連ねてあつ
た。見る／＼國津の顔は赤くなつて、目からは涙がはら／＼と零
れた。

「如何した君、何が書いてあつた。一寸見せ給へ。」
國津は黙つて手紙を握つたまゝ、傾向いて居る。

63 「ねえ君、見せてもいいでせう、見せ給へよ、一體どんな事が書

64 いてあるんか、存外何でもなかつたんぢやないか。

「何でも無い事があるもんですか。」

「ぢや見せ給へ、ね？」

野口が其手紙へ手を掛けると國津は別に拂ひもせず渡して終

ふ。

「成程、最初から酷しいね、うむ、ぢや、君は學校へ手紙でも遣

つたんだね。」

「叔父や叔母に頼まれたからです。」

「然し、爰に（いやらしい手紙など）と書いてあるせ。」

「夫があゝの女の卑しい處なんだ。僕が親切で言ふ事を曲解してる

んです。」

「うむ、ぢやア君もう一度呼びつけて出来る丈の辯解をし給へな。

君も男ぢやないか此儘には済まされないよ。」

「なアに、あんな墮落女に何が分るもんですか、自分で墮落を證

據立てゝるんです。」

「けれども可笑しいね、中にはこんな失敬な事が書いてある癖に、

上へ持つてつて御懐しきとは妙ぢやないか。」

「其處が墮落の證據です甘い酒と見せかけて毒を盛るやうなもの

65 「夫やあんなり酷だよ、之には何か事情があるだらうと思ふがね

え、兎に角も一度逢つて見給へ。」

「好いですが、もう逢ひません、一生もう逢ひません、どんな事があらうと逢ひもしなければ相談にも乗りません。」

「けれども君、女はまた夫でも可哀さうだよ。」

「好いですが。僕はもう何もかも忘れて終ひました。」

國津はごろりと腹這ひになると両手を組んで顔に當てた。肩が折々びくびくと動くのは泣いて居るのであらうと野口もそゝる哀れを催す。

戸外を新内が流して行つた。十時過ぎる頃から春雨がしとくと降り出した。田崎はやつぱり歸る氣色も無い、國津は最前の儘

すや／＼うたゝ寝の夢に入つた。枕元には菜の花畑の寫生畫が淋しく置かれて、其側に野口は此室の人々に當てゝ寄した中尾からの手紙を薄暗い洋燈で一心に讀んで居た。

十三

其夜半の事、階下では賊が這入つたと言ふのでゴツタ返してゐる處へ田崎はのそ／＼と濡れしよびれて歸つて來た、鶏が鳴いたのは間も無くであつた。

翌朝國津が目を覺ますと、珍らしく田崎が先に起きて居て、「君が起きたら頼み度いと思つたがねえ。」と言つた。

『どんな事?』

と國津は昨夜の涙に腫れぼつたい眼を摺り乍ら聞き返した。

『どんな事つて……君には少し迷惑かも知れないが、是非手傳つて貰ひ度い事があるのだ、如何だらう?』

『さア……大して學校に障りさへしなければ。』

『夫りやもう早いにした事は無いが、都合で夏休みになつてからでも好いんだ、尤も仕事は少し俗なんだが其代り存外金は這入るよ。』

『さうですか、實は僕も金の這入る口を探して居たのです。』

『どうして? 何に要るの?』

『來月から自活しやうと思つて……。』

『叔父さんの方は?』

『少し考へがありますから關係を斷たうと思つて……。』

『如何して?』

『如何してつて事もありませんが、人の世話になると言ふのも餘り好い心持ちやありませんからねえ。』

と國津の聲は自づと沈む。

『夫ぢやお京さんの約束は如何するんだい?』

『え、別に約束つて事もありませんし、あんな人の事は最早念頭にありません。』

「實際かい君？」

と田崎の聲は國津の言葉を危むものゝやうに聞えた。

「實際です。」

と國津はきつぱり答へて。

「如何してだらう？」

「如何してつて一體君達の思つてる程、僕と叔父との關係は深か
無いのです、まして彼んな墮落……」

「之墮落？誰が、お京さんがかい？」

「否、あなたがちお京ばかりを言ふ譯ぢやありませんが……」

「分つた、昨日の置手紙に何か失敬な事でも書いてあつたの

で、夫で君怒つてるんぢや無いか？」

「君知つてるんですか？」

「知つてるとも、現在僕が受取つて置いたのだから。」

「あゝさうでしたか。」

「そして何だよ、僕が逢つた時も何かブツ／＼言つて居たよ、然
し女の方は兎に角、君の方にそんな勇氣があらうとは思はなかつ
たよ。」

「そして君に何を言つて居ました。」

71 「さア………能く分らなかつたけれども、何でも君に手紙を出し
て呉れないやうにとか言つて居たよ。夫ぢや手紙にもそんな事で

も書いてあつたのかしら。』

『さうです……實に……』

『夫で君はもう全然お京さんを断念めたかい？』

『断念めるも何も無いです、初めつから何とも思つてやしないのだから……』

『さうかねえ、豪いね、夫ちやア一ツ奮發して僕の仕事を手傳つて見給へ。』

十四

田崎は懐中へ手を入れ乍ら

『夫で丁度好い事には、此處に僕が外から這入つた金が少しあるから、之の中を君に拾圓前金として上げて置かう』

『否夫には及びませんまだありますから』

『然しお互ひに約束の破れるのも妙で無いから手附と思つて受けて置いて呉れ給へ、夫にねえ、仕事は譯なしなんだが只少し遠くまで出張して貰はなくちやならないんだが好いかい？』

『好いですとも何處です。』

『越後なんだ。』

『越後？』

『む、新潟だ、尤も僕も行くし外にも連は皆東京から行くんだ。』

「夫ぢやア好いのですよ、知らない土地ですから連がなくちや……」
 「さうとも、夫でね仕事と言ふのは、其地の百景と言ふんだが景
 は添へで、詰り百美人なのさ、モデルは土地の藝者なんだが、生
 きたのを使ふほど贅澤も出来ないから、何れ寫眞さ、少しぐらゐ
 違つても奇麗にさへ行けば好い譯さ、好いかえ引受けて呉れやう
 ねえ？」

「好いのです、引受けました。」

「ぢやア拾圓、渡すよ、但しね、旅費雜費は向ふ持で、書は一枚
 五圓の割合で君に二十枚頼む事になつてる、好いかい？」
 「好いのです。」

「何れ僕も前金を少し受取らうと思つてるから若し君が又要れば
 其時は遠慮なしに言つて呉れ給へ。」

「好いのです」

「ぢやア金は取つたね？」

「受取りました。」

「ぢや、何れ近い中に先の催し主にも逢はせるから、」

田崎は間もなく座を立つた、やがて下へ行つたらうと思ふ頃、野
 口がむくくと起き上つた。

「國津さん。」

「え？」

「今の話に乗る積りかい君は？」

「今の話とは？」

「僕、床の中ですつかかり聞いてたけれ共ね、新海行さ。」

「あ、彼かい？まア行つて見やうかと思つてる。」

「然しねえ金計りで行くならまア考へ給へよ。」

「如何して？」

「何も僕からお止しなさいと言ふ権利は無いけれども餘り人の口
に無暗に載せられない様にし給へ、今が一番大切な時だから、中
尾からの手紙にも書いてあつたよ。あの人も一寸した金の爲に遠
國へ行つた爲に病氣は脊負ふし、歸る事も出来ず、困つてるさう

だ。」

「ふーむ？何處へ行つたんだらう。」

「北海道だとさ。」

「へえ、そして病氣は何です。」

「風邪をこぢらしたと言ふから、何か咽の病かなんかだらう。」

「ふーむ氣の毒ですね、然し僕の様な孤獨は夫も好いですね。」

野口はその儘口を噤んだ。

十五

其後は國津も引籠つてばかり勉強して居た。間もなく夏休が來

た、お京の處からは何の便も無い、流石に心持悪く幾日か過した、田崎はくれぐれも報知次第来てくれる様に國津に言ひ置いて約束の新潟へ發つて行つた。野口も昔の里親とやらを訪問て埼玉の方へ出かけて終つた。獨ばつねんと残つて見ると、そゝろにお京の事が氣になつてならぬ、一圖に墮落呼はりはしたものの、流石に叔父との關係を斷つまでも國津は強くない、お京が如何思はふとも、又叔父の方にどんな考へがあらうかしれぬと言ふ未練が出て來る、一層の事叔父に打ち明けて田崎からの前借は返して貰ひ、久しぶりに日光へ行つて見やうかとも思つて見たが別に向から來いとも言はぬのに押しかけるのも間が悪し、もしやお京に顔を合

せるやうな事があつても嫌なり、右か左か、決しかねて居る處へ、叔父の自筆で分厚な手紙が届いた。

拜啓、承り候へば、貴下には毎々お京へ當てみだらなる手紙御送の由、元よりお京と貴下とを配遇せむと存せしは小生夫婦の考へに候へども、親とも恩人ともある可き小生等に一言の御相談もなく左様なる振舞有之候人は後來の品行も案じられ候に付亡き兄上、貴下には父上に對しては申譯なき次第ながら之も定まる運と絶念め只今迄の關係斷然お断り申上候間左様御承知被下度、右は小生等夫婦のみの考へには無之、お京よりも貴下に對しても御約束にてもあらば取消しくれよとの申出でも

有之候次第に候間、何卒誰を恨む迄もなく、身から出たサヒと御あきらめ被下度お京も其爲には酷く學校にて迷惑を蒙り居り候由、他事乍も氣の毒と思召され度候、辨解其他の事御手紙被下候ても無駄に御座候間左様御承知被下度、尤も學資の義は貴下母上へ呈す心にて愚妻より今迄の半額丈御送り申上候間之丈は是非とも御受納被下度願上候、今後はお京に對する邪念すつぱりと御取捨被下度願上候也。

七月廿日

榎田福吉

國津要助殿

之を見終つた國津の顔は青かつた、其後二日許りぼんやりと暮

したが、三日目の朝、凡てを断る手紙を叔父の許へ出すと同時に俄に鳥の立つやうな騒ぎをして、藤堂から旅費を借りると着がへも持たず、畫の具箱一ツ肩にプランと下げて、山桐の下駄で新潟へ田崎の後を追た。

十六

その間に田崎からお京に宛て匿名の手紙を出した事は誰も知らなかつた、知らぬ女名前の手紙を受けて少し胸を蕪かせ乍らもそつと開けて見た、中には無論本名が書いてあつたけれ共、文言は至極簡單なもので、思はぬ人に思はるゝ人ほど不幸なものは無い

と言ふ事丈が美しい手跡で如何にも巧みに書いてあつた。つくづくお京は要助を厭はしく思つた。

そもく、要助が東京に出る事に極つて、お京一家で其人を停車場に送ると等しく、誰が口から如何傳へられたのか、立ち所にお京の婿が極つたと言ふ事は近邊の評判になつた、毎日行く裁縫の御師匠さんでは友達がからかふ。店では店で妙な當付を言ふ。したが其頃はまた無我夢中で何がなし新調の着物でも出来て来るやうな氣持で過したが、一ツ年を長つて見ると、夫も樂しみよりは苦勞に變つた。今迄は左程氣にしなかつた、洋畫家の名も能く氣が付く、土地に入り込む人々の中で油畫の道具でも下げてる人は、

外國人でもついで顔を見るやうにもなつた、可笑しなブツツの帽子を冠つた若い東京の畫家の群などは殊にお京の目を誘いた、お京が男を見る眼はこの頃から急に肥えて來た。

その時分からお京の兩親は娘の上京説を唱へ出した。母親は何處か御得意の中の大きな邸へでも見習ひにと言ひ父親は一層女學校へ入れた方が行くは要助の爲に好からうと言ふので遂々その方に團扇は上つた。

お京は始めの中こそ知らぬ土地へ一人で出る事を恐るしくも思つたものゝ、話の進むに従つて避暑客の美しい令嬢の住む都を見ると言ふ事はさして厭でもなくなつて終つた。折々は隠れるやう

にしては見覚えの束髪にも結んで見た。

いよいよ上京して要助を見たお京は、己が空想の餘りに先立つたのに驚かされもし又情なくも思つた、もう二年近く東京に住んで居乍ら餘り昔の儘の要助の様子を倦きたらず思つた。

女學校に這入つて又お京は膽を抜かれた。お京の考へて居た學校の同輩は皆一様に親切で、先生は優しく生徒はお互ひに仲の好い處であつた。その空想は皆外れて、人は皆お京をわだかまも外國人の捕虜のやうな目をして見た。好意に言へば忠告だが惡意にとれば、辱しい様な事をどしどし言ひ囃された、東京でせぬ事をしたと言つては笑はれ、せぬと言つてはそしられ、お京は欲しいま

の浪に採まれた。

十七

教師の中でも女は舎監を外くほか、皆底意地の悪い人ばかりのやうに思はれた、男の教師はどれも一樣に若かつた、妻帯の人は僅かに學監のみであると聞いた、何れも生徒に優しかつた中に、殊にお京の爲に親切だつたのは村田と云ふ英語を教へる丈の高い廿八九の人であつた、能くお京が運動場などで一人ばつねんと群に離れて沈んで居る時、そつと教室へ呼び込んで種々と面白い小説の話などをして呉れた。

女學校と言つても私立ではあり、生徒と教師と親密であると言ふ事が呼物であつた丈に、斯う言ふ處を見ても公けに彼是言ふものは少なかつた、然し其沈黙は長く續かなかつた、色の白い口鬚のピンとした村田の風采はうら若い生徒達の目を引き易かつた爲か、忽ちお京は級中の除物にされて終つた、此時お京は或夜夜店で白靴の短刀を買つた。

學校では今日も昨日も村田とお京との關係を大袈裟に傳へられて行くのだ、お京は初めた泣いた、次には友達の袖に縋つて其同情を仰いだ、けれども誰も振りむいては呉れなかつた、其中に舎監のみは優しく慰めて呉れた、然し夫も間もなく斯う言ふ噂の爲に消されて終つた。

爲に消されて終つた。

「榎田さんは、舎監に付け届けが好いから御言叱がなくて幸ねえ。」
 舎監の耳にも、お京の耳に這入るやうに此言葉は寄宿中を荒して歩いた、二人はつい顔を合せる日も少なくなつた、其中でも村田は相變らずお京を勞つて日曜にはさつとお京を其寓居に呼んだ口惜しいからもう行くまいと思ひ乍ら、そんな噂はどこの風と言ふやうに、平氣で親切を盡してくれる村田を見ると、つい又其情に引かされて、連れだつて遊びにも行けば一所に食事もする。其度毎にお京は、要助と自分との約束でもない釣束が氣になつて氣になつて、どうしてもはつきりと晴やかな顔が見せられなかつた。

村田は又お京のさう言ふ様子を見ると、必ず、「何を貴女は其様に沈んでるのです、貴女には心をうち開ける友達は無いのですか、貴女は私を先生と思つてるから不可ない、私は随分貴女の爲には、言はれぬ苦痛をしますよ』

と言つては、ちつと伏目になる。

お京はついに要助の事をうち明けた、けれ共言號であるとは言はなかつた、只心にも無い縁談である、其上厭しい其人の戀を如何しやうと、其頃要助から送つた手紙まで見せて訴へた。

村田は顔色を變へて怒つた、慈悲の無い父母である、夫は小さな愛に捕はれて大いなる愛を忘れたものだ、涙まで流してお京

を哀れんだ、爰に他人でさへ貴女の弱々しい心に泣くものもあるのに、血を分けた父母が其仕打は何事である、宜しい私が言つたと言つても好いから、其關係はきつぱりと斷つてお終ひなさい、いざとなつたら私は貴女の一身上位きつと引受けますとまで言つて、私は貴女を友達以上に思つて居るのですよと、判然とお京の耳に情ある聲で囁いた、お京は此言葉を胸の中に毎日繰り返さぬ日はなかつた。

十八

お京は父の許から要助には何の引かゝりもなくなつたと言ふ便

りを得て、はつと息を吐いた、けれ共その事を村田にうち開けた時、先頃の言葉にも似ず、其人は別に大して喜んでも呉れなかつた、然しお京は何となく肩の荷の下りたやうな氣がして、身が軽くなつたやうに思はれた。

新潟の田崎からは繁々と文の便りがあつた、其中には國津の向ふへ行つた事も知らしてあつた、其人の沈んでる様子も知らして來た、何か貴女に對して不平があるやうだとも言つて來た、然し僕も國津とは友達だけ共、貴女の方を夫以上に尊敬する、あゝ云ふ人に思はれる貴女は不幸だ、あゝ言ふ人と言號にした父母は無慈悲だなど、執念く夫を繰り返して同情を寄せて來る。お京は

何と思つてか、今では無關係になつたと言ふ事を知らしては遣らなかつた、只身の不幸を訴へて其同情を乞ふた、其中に時々思はるゝも辛いけれ共、思ふ人に心の通せぬのも悲しいものだと言ふ事を大膽に書くやうになつた。

田崎からは頻りに眞面目な手紙が來る、遂にお京は村田に對する自分の戀をうち明けた、其儘田崎からの便りは絶えて終つた、早まつた我仕打を悔んでお京が躊躇切つてる或る土曜日の事、二三日欠勤を案じて居た村田から、國の父が尋ねて來ると言ふので迎への俵を受けた、お京の胸は早鐘を撞いた、かねて村田の親切は言ひ送つてある、父の方からも近頃は村田の許へ自分を頼

む状は幾通となく来るやうになつた、母の許へは夫以上に言ひ送つてもある、一度父上に先生に逢つて置いて貰ひ度いとも言つて遣つた、夫にしても私にも知らせず先生の許へうらつけに行つたのは、若しや？………と思ふと、パツと顔が赤くなるやうに覺えた、急いで居乍ら幾度も鏡の前へ立つては衣紋を繕つた、羽織も幾枚か着かへて見た、やうくの事で俵に乗つてもまだ忘れものをしたやうで、心は上の空に飛んだ。

「御父さんが先生に逢つて、私の手紙で書いて上げたやうな方と信用して下さつたかしら。」之が一番お京の氣を揉ました。

「御母さんから何か御話があつて、兎に角一度逢つて見やうと言

ふので出て入らしたのかしら、夫とももう話は始つて居て、今日は私の前で公然と先生が………あ、極りが悪い………けれ共何でも無いのかもしれない、だつて、何でもないので御父さんが突然先生の方に行く法は無い、さう言へば此間中から、近い中に是非聞いて貰ふ事があると言つて入らしたのは、もう御父さんから話でもあつたのかも知れない、兎に角俵なんか寄すのからして不思議なもの只事ぢやない。」

俵はがらりと、とある小路の石橋を渡つた、もう目の先に村田の家が見える、お京はそつと紙白粉で顔を拭いた。

十九

小路を這入つて同じやうな門構へのがらく戸を締めた三軒目が村田の家であつた、形ばかりの式臺の前に立つた時お京の足は我しらず震へた。

取次にはいつも見慣れた小女が出た、

「先生は？」

と言ふ聲もいつものやうに元氣よく出ない、

「あの、旦那様は御病氣で御寝みになつて入らつしやいますか、まあどうぞ御上り遊ばして……」

「御病氣？」

お京は押されるやうに思はず式臺へ足を掛けたが、俄かにぞつと總身が冷たくなつた。

もどかしくコートの紐を解いて其處へ脱ぐと、小女は、

「あのどうぞ一寸奥様の方へ入らして下さいまし。」

お京は飛び込んでも病室へ行つて見たいのは山々であるけれ共、小女の手前さうも出来ない、心ならずも茶の間へ通る。その襖の處で村田の母は迎へて呉れた、小女が奥様と言つたのは此人の事で丁度五十格構の引結めの束髪を根上りに結つて顔色の悪い大柄な女だ、何日笑ふかと思ふやうな恐い顔をして、煙管をポン／＼

拂いては煙草を呑む、

「まア能く来て下さいました。」

妙に切口上で太い聲だ、

お京は無言に頭を下た、玄關の様子にも其室の様子にも一向父の居る氣色も無し、村田の母も馬鹿に落着いて居る。

「先生が御悪いさうですけれども……」

とお京は何か恐ろしいものでも落ちて來のを待つやうな心持でそつと言つて見た、

「さア夫に就きましてね。」

と母親は眉根に深い入の字を寄せたと思ふと、もう古びた長火

鉢の縁で煙管を音高く拂ふ途端に、村田の居間で幽かに咳を咳くのが聞えた。

お京の胸は急に早鐘を打ち出した、

「あの父が上つて居りますやうな、あの、御手紙でしたけれども」

お京は成可く母親の言はうとしてる事を避け度いやうな氣持がして斯う言つて見た、

97
「夫は貴女、村田は端書でも貴女の事だから來て下さると言ひましたんですが、私はどうも不安心でね、もし入らして下さらないと種々心配な事があるもんですから、夫でつい、御父様が入らしたやうに書かしたので彼は村田が悪いのぢやありませんよ。」

と濟して云ふ、お京は前から蟲の好かぬ人の口から平氣で斯う聞かされて腹が立つ、

「わアさうでございませうか、私は父なんかの上京よりも先生の御病氣の方を大切に思ひます。」

斯うさつぱり言つて遣りたかつたけれ共面倒臭いと思つたので黙つて居た。

母親も暫く無言で煙草を呑んだ、

「ではあの、私も急ぎますから一寸御見舞を致しまして……」

お京は不意に膝を立てた、

「あらまア……」

と母親は両手で押へるやうな眞似をし乍ら一寸ひせて煙草の煙を吐いた、

「村田に御逢ひになる前に折入て私から貴女に伺ひ度い事があるんでございますよ」

お京はパツと顔が赤くなつた。

二十

村田の母は改めて又一服吸ひつけた。

99
お京の膝は萎えたやうに疊について終つた、いくら確りしやうと思つても身内が震へるやうで息が荒くなるのが自分でも分る死

刑の宣告を受けける前も殆んど此様であらうと思はれた。

「貴女村田をどんなものと思ひます」

と言ふ母親の聲がもう言はぬ先から聞えるやうに思はれた。

「不省でせうが私を母にして下さいますか。」と言やうにも聞える。

「村田は其爲に體を痛めて」

と聲が沈むのも目に見るやうにはつきりと分る。

お京は其まゝ段々暗い穴の中に這入つて行くやうに思はれた。

「就かん事を伺ひますが、たしか山科てい子さんは貴女の級でし
たね。」

母親の聲は不意に太く響く。お京は夢が覺めたやうな眼をして

村田の母を見た。

「さうでせう？ 山科てい子さん？」

お京は夢の中で言ふやうな聲で、

「山科てい子さん？」

と同じ言葉をくり返した。

「さうです、いつも日本髪に結つた色の白い、品の好い御子さん
ださうです。貴女の級だといつも子息が申しましたが違ひました
かしら。」

母親はお京の顔を覗くやうにした。

「てい子さんは私の級の一番の人望家でございます。」

お京は只物足らぬやうな氣持がし乍らも斯う答へた。

「貴女大さう仲が好いさうぢやありませんか。」

「何方とでございます。」

「何方とつてホ、ホ、てい子さんときさ。」

「それは仲は好うございます。あの方は私が始めて學校へ上りました時から御親切だつたもんですから。」

「まアさうですか、夫に就てね、貴女に折入つて願ひ度いことがあるのですが聞いて下さいますか。夫も皆子息からの頼なんです
がねえ。」

「夫や先生の御爲なら。」

とお京は力を入れて答へた。

「實は御辱しいのですが、子息の病氣も其方から起つたのですよ。」
お京は只不審の眼を見張つた。

二十一

母親は其處で又、急がしさうに一服吸ひつけた。

「御願ひと申しますは、外でもありませんがね、實はあの山科さん宅へお貰ひ申し度いのですが、あの方はたしか御嫁に入らつしやる方でございましたねえ？」

お京は只呆然にとられて返事も出来なかつた、母親は構はず

『先達中からどうも子息の様子が可笑しいもんですから、私も氣をつけて居ますとねまア可笑しいぢやありませんか、斯う言ふ手紙の屑を拾ひましたのさ。』

と母親は、煙草入の中から洋紙やらの切端を摘み出して、

『そらね、分りますか、何だか揉みくしやになつてるから能く見えなないけれども、そら、此處を御覽なさい、「もし貴女にして、我が望みを避け給はんか、小生は忽ち貴女が愛讀の金色夜叉に於ける第二の貫一ともならむ！いなく、我れも無念無想の者となつて何處にもあれ、深きく山奥に籠らん、あゝ其時の我が失望落膽、落膽、落膽、落膽、ね、あとは、失望とか落膽とか言ふ字ば

かりが目茶苦茶に書いてありませう？、そして、そら、此處にも此處にも山科、山科、てい子てい子、ね、こんな字か一ぱい書き散らしてありませう？、夫から私も氣になつてしやうがありませんから種々に手を廻して聞くと全く思つて居ると言ふもんですか
らね、ホ、親馬鹿とお笑ひなさるかもしれないけれども、いゝ年をして貴女に手を下げて願ふんでございますよ、貴女丁度お友達ならその方の御心を夫となくお聞き下さいませんか、ねえ？』
お京は我知らず沸き上る涙を見せまいとちつと傾向いて終つた。
『貴女こんな事をお願いひして失禮な奴と思つて下すつちや困りますよ、私の方ぢや貴女を親類とも何とも思へばこそ願ふので、決

して見下すわけでも何でもありませんから、え、好うございますか。」

お京は只頷いた、

「ぢやアその方の心を聞いて見て下さる事は出来ませうか。」

お京はそつと口唇を噛んだ儘黙つて居た、

「不可せんか。」

母親が膝を進めた時、

「御母さん、御母さん。」

と村田の呼ぶ聲がした。

「おや子息が呼んで居ますから一寸失禮。」

母親の姿が襖の向ふへ消ると、堪へた口惜涙が止度なく溢れた、お京は齒を喰しはつて泣いた、その時不意に椽側で村田の咳拂する氣色がした。お京はツと立つて無断に村田の家を出て終つた。

二十二

新潟に田崎の後を追つた要助は、學校の方へも病氣届をして其儘夏の始めまで吐息を附きく畫布に向つて居た。一行の中他の人々は何れもさし支へて來なくなつた爲に秋までかゝるといふ條件の許に二人は五十枚づゝ引うける事になつたのだ。

「どうしたんだ青い顔ばかりしてさ、馬鹿々々しいぢやないか。」

とは、同じ室の田崎が要助の浮かぬ顔を見る毎に言ふ言葉だ。
 『向ふが他の男に心を移してゐるなら、此方も其氣になるが好いちやないか、お京ちゃんばかりが女ぢやないせ君。越後は美人の本場だせ。』

要助はいつも斯う言ふ時、

『然し理屈ぢや計れるものぢやないよ。』
 と言ふ。

近頃は田崎も呆ねて口を黙んで終つた。田崎は能く宿を明けた要助は其様な時いつもお京の寫眞を出して眺めてまんぢりともしない事が多かつた。

『オヤ／＼奇妙々々、不思議な人から手紙が来たぞ、オット中を見ない中は君には教へられない、オヤ／＼之は大變、一寸僕失敬するよ。』

田崎は或朝獨りでこんな事を言つて手紙を掴んだま、忙て、宿を飛び出して終つた。

要助はニヤリと笑つたま、椽先で筆を洗つて居た。

直さに宿の小女が取り残したと言つて一封の手紙を又置いて行つた。矢張り田崎宛で強く書いてはあるが確かに女文字だ、要助は何の氣なしに裏を返して見た、Kの字が一字書いてある、

『K? 京! そんな事はゆるまる。』

打消してもなほ一日その字が頭を去つて呉れない、夜に入つて田崎は歸つて来た、要助は直ぐに手紙を出した、
 『オヤ?』 田崎は疑はしげな眼をして要助を見たが別に何も言はなかつた。

『Kつて誰だい?』

要助の聲は少し震へを帯びて居た。

田崎は夫に答へず隠すやうにして手紙を讀んで居る。

『ねえ君、Kつて誰。』

『煩ねえ、人が手紙を讀んでるのに。』

強く言はれて要助は黙つて終ふ。

『何だ、そんならさう早く言つて寄せば好いのに、人にさんく待ぼけさして。』

田崎は獨でブツ／＼と呟く、

『何が君、誰か来るのかい?』

『ム?』

と今度は案外優しく、

『ム、来た事はもう来たけれども歸した。』

『一體夫は誰さ、』

『……………』

『秘密ですか。』

「さア……秘密と言へば秘密だが……」

「そのKの字かい？」

「まアさうぞ。」

「誰だらう？女でせう？」

「まアくさうぞ。」

「誰です？」

「言はうか？」

「エ、！」

「お京さんぞ。」

「え、？」

二十三

「どうして来たんです、え君、ほんとにお京なのですか。要助は目を見張つて乗り出した。」

「さうさお京さんさ、嘘を言つたつて始まるもんか。」

「然し何しに来たんでせう。」

「君に詫りに来たのさ。」

「え、詫りに？ぢや後悔したんですか？」

「さう早合點でも困るよ。然し早く言へば詫りに来たのには違ひなしのさ。」

「けれども夫なら何故僕に逢はして呉れないのです、又お京さんだつて君を呼び出すなんて水臭いですね。」

「夫は仕方が無いさ、われ丈の無禮を君にして置き乍ら今更澄まして逢へる面かい。」

「しかし僕はお京さんが後悔さへして呉れたら何とも思やしないんだからね。」

「チエツ、君は夫だから女に馬鹿にされるんだよ。考へても見給へ、お京さんが斯うして表向でも後悔して來たのには何處にか何か其理由があると思へないかい？」

「夫りや君良心の苛責さ。」

「お話にならないや兎ても、」

「では何だい？」

「何だつて……驚くねえ君のお人良にも……實際呆れるよ。」

尤もな、僕は君のあんまり善人なのに感じて君を敵視するのを止めた一人だからなア。」

「そんな事は好いよ、夫よかも夫からお京さんは如何した。」

「歸したつたら。」

「何處へ？」

「何處へつて、何處でも貴女の行き度い處へ行き給へ、然し國津君には僕が付いてますからとても貴女のやうな狸には逢はせませ

んよつて言つてやつたのさ。」

「そんな君、慘酷だねえ君は、昔つから氣の弱い人だ、何をするかしれやしない、僕は見て來るよ。」

「馬鹿、何を見に行くのだ。」

「知れた事ぢやないかお京さんをさ。」

「實に呆れ返つてものが言へないよ君は、夫れぢや言ふがね、彼奴男に捨てられやがつたのだよ、夫で今になつて思知つたと言ふのだ、だから兎ても許しちや呉れまいけれども詫に丈來たと言ふのだ。」

「夫見給へ、なほ哀れぢやないか。」

「何が哀れだ、自分勝手に言號の良人を捨て、外の男に心を移してさ、サテ又その男に嫌はれたからと言つて、濟まないと思つたら尼にでもなる事か、又ぞる言號の處に詫に來るなんて、何處まで押が太いのか夫が君にやア分らないのか。」

「けれども君、遙々こんな土地へまで女の身で來るんだもの、氣の毒ぢやないか、あゝ僕は氣の毒に思ふよ。」

「其處が向ふの手なんだつてば、分らない男だなア。」

「けれ共ねえ、そんな事で、若しあの人が短氣でも起したら僕は叔父や叔母に濟まないからねえ。」

「馬鹿言へ、濟まないは向ふで言ふとだ、男一匹をさんく馬鹿

にしてさ、夫で済まないと言はれ、やア天下に之ほど有難い事はないや、舌でも出して笑つて遣れ。』

『そんな野蠻な事は僕には出来ないよ。』

『然し聞き給へよ、假りにも女の寶とする操をだよ、彼奴のやうにないがしろにして構はないものかね、僕は男の操は持たないけれど共、僕の知つてる女は、みんな僕に操を立てればこそ僕の儘になるんだ、そうして僕に捨てられて泣いてるんだ、僕はさう言ふ女が好きさ、この男に捨てられたらあの男と、當を付けておくやうな女は大の大嫌だ。』

田崎は眼尻を上げてその頭を振つた。

要助はたゞ呆然として居た。

二十四

夫から直きに秋が来た、要助は其中にも幾度か幾度か、お京へ便をと思つたけれ共、田崎に繰り返し女の不貞を言ひ罵られては、氣の弱い男の夫もならず、瘦さへ見せて一人その人の身の上を氣遣つて居た。頼まれるもの、油畫も大抵終りに近づいたので都へ歸る日を田崎は浮きくしては楽しんで居るけれ共、國津はとんと氣の抜けたやうにぼつとして居た。

『オイ如何したんだ、もう明後日は東京へ歸ると言ふのに、何て

言ふ不景氣な顔をしてるんだ。髯でも剃つて來給へ。』
 國津はフーッと息を吐いて腹這になつた、前裁にも鳴く、この土地ではもう朝夕に給も重ねる。

『書の方も幸に評判は好し、先づ東京へ歸つても鼻が高い譯さ、大いに歓迎會でも開いて貰うと思ふのに君の其顔ぢや餘り情け無いやね、一處に居た僕が飛んだ慘酷にでも扱つて居たやうで見付が悪いやな、えオイ、しつかりしないかい。』
 國津はツと打伏しになつて終つた。

『何だい、オイ如何したんだ。』
 田崎が襟上を取つて引き上げると、國津の顔はぐつしより涙に

濡れて居る。

『又かい君』

と田崎は情け無い顔をして、

『如何してさう君には涙があるんだらうね何が悲しいんだい馬鹿々々しい、別れの惜しい人でもあるかい？』

『馬鹿な事を』

國津は僅かに之丈言つてパイと起き上つた。

『ぢや何で泣くんだ』

『僕は東京へ歸り度くはない………』

『定りを言つてるせ。止せく未練らしい。又彼奴の事だらう。』

「なアに、あんな者は如何でも好いとして叔父や叔母に濟まないからねえ。」

「誰か？ 濟まないと云ふのは向ふで言ふ事だ。間違へちや困る。」

「戯言ぢやありません、僕は絶念められない、折角悔悟したものを……き、君の故だ。」

「狼狽へちや困るね、まア〜東京へ歸つて見給へ、お京さんが丸鬚でいも歩いてるだらうよ。」

「……………」

「夫とも大ハイカラで近頃流行の女優にでもなつて浮かれて居るか」
「……………」

「ねえ君、オイ返事をし給へな。」

「僕は東京へ歸つた處でもう學校へも行けやしな。」

「そんな事があるもんか、無断でも休んで居やしまいし。」

「然しもう嫌ですよ。」

「まアさう御仰たもんでもありますまい。夫に君、丁度向ふへ歸ると間もなく、秋季の展覽會だ、ねえ、楽しみぢやないか、君は何を出すんだ、僕は此間寫生したらう？ 彼を出す、さうだ、君は全で彼れから後は蛻の売だから何もあるまい、ある〜そら此春の菜の花畑！、彼が好い、彼を出し給へ、え、君。」
「あんな物は兎ても駄目ですよ。出た處が仕方がありませんよ。」

「なに、仕方が無い事があるもんか、彼れを出して大いに君の名前を揚げるさ。」

「そんな事は如何でも好いですよ。」

「如何でも好い事があるもんか、さうし給へ。」

「そんな事をしたつて仕様が無い。」

國津の眼には又涙が溜つた。

二十五

何の彼のと延引はし乍らも、到々田崎に引張られるやうにして國津は東京へ歸つて來た。

其時最早展覽會は上野に開かれて居た。田崎は初戀だといつも言ひふれて居る十二三の可愛い女の子の肖像畫を何時手を廻したのか出してあつた。國津のは藤堂で見計らつて彼の菜の花畑の油畫が出品してあつた。

上野へ着くと其儘展覽會へ廻つた田崎は、

「どうだい、豪い人ぢや無いか」

と國津のすつこけた肩を叩いた、國津は只、

「うむ」

と言つた儘ズルと下駄を引摺り乍ら歩いた、

清水堂の裏手から土手へかけて一面に植ゑられた楓は一様に紅

葉して美しかった、

『矢張東京はいいなア』

田崎は獨言のやうに呟いて國津を見たが別に何とも言なかつた。晴々と青い空の下を美しい蝙蝠傘が幾つか筋かひに横ぎる向ふの、展覧會の入口に立てた日の丸の旗が秋風にひらくと震へて居る。何處ともなしに風船の笛の音や、物賣聲が突拍子もなく起つてはスーッと消える。

『やア……………』

と暫くして國津が叫んだ、

『何だい』

と田崎も國津の見る方を眺めた、別に變つたものも無し。

『何を見てるのさ、オイ國津君。』

國津は忙てたやうに、

『そら見給へ、ね、ソラ。』

『何がソラかい。』

『ソラ見給へな、向ふにクリーム色の蝙蝠傘をさして行く女があるでせう？ 背廣を着た男と一所に。』

『うむ、あれが？』

『あれです、』

と言つた國津はちつとけはしい目付をした。

「何が彼なんだい？」

と田崎も不審げな顔をした。

其時クリーム色の傘をさした女は此方を振り向いた、國津ははつとしたやうに足を止めた、

「如何したんだ、知つてる人かい？」

「なアに。」

と言つて吐息を吐くと又歩き出した。

「不審しいねえ。又京ちゃんのことでも思ひ出したのかい？」

「なアに、さうぢやありませんけれ共……あの男が英語の先生なんです。」

「くさくさうから？いつか聞いたお京さんの相手から？」

「うむ、成程君よりは餘程ハイカラだよ。」

やがて人々に混れて其人達は見えなくなつた。

二十六

會場へ這入るといつの間にか二人ははぐれて終つた。

歩み勞れて國津は會場を出た。もう池の端の家々の軒には燈火がちらくとして、宵月も白くかゝつて居た。

喪心したやうな國津の心にも、今日の會場に於ける自分の作の

評判の好いには、自から得意の面持になるのを禁じ得られなかつた。何となく心も肩も軽くなつたやうな心持で、いそくと藤堂の家に向つた。

主人は丁度留守であつた、久し振りに三階へ昇つた國津は、塵だらけの机の前へぐたりと勞れた足を延ばした、燈火は無いけれども月は明取から冴々と間の中を照らした。

野口の机と、中尾の机とは室の片隅に重ねてあつて其人達の居つた處には見かけぬ新しい机が据えてあつた。野口は其後谷中の方に流浪していると聞いたが如何したか、中尾は寒國で受けた風が元になつて肺病になつたと聞いた、同じやうに此處に暮した人

の中二人はもう欠けて終つた、田崎は此先何年と言ふ事なしにありして暮して行くのであらう、あれも一生是も一生、自分は何なる？

國津は、つと立つて座り直した、今迄自分の蔭になつて居た田崎の机の上に、一通のハガキが乗つて居る、何の心もなしに一寸取つて裏を返して見た、

拜啓永々御世話に相成候娘京こと、幸に良縁ありてさる銀行へ勤め候人の許へ嫁き申候につき此段一寸御知らせ申上候、

國津氏へは御許より宜しく御傳言の儀願上候早々
國津は間もなく人々の止めるのも振り拂つて郷里へ歸つて終つ

た。只僅かにはかない新聞に好評を得た菜の花畑の批評を唯一の土産にして。

國津は今も猶都に對する恐怖の念を去り得ないで、一人我が影にまでおどくして、何の希望も欲望も無く、獨とぼくと暮して居るのだ。

恐怖終

明治四十二年九月八日印刷
明治四十二年九月十三日發行

怖 恐

定價金 參拾五錢

不許複製

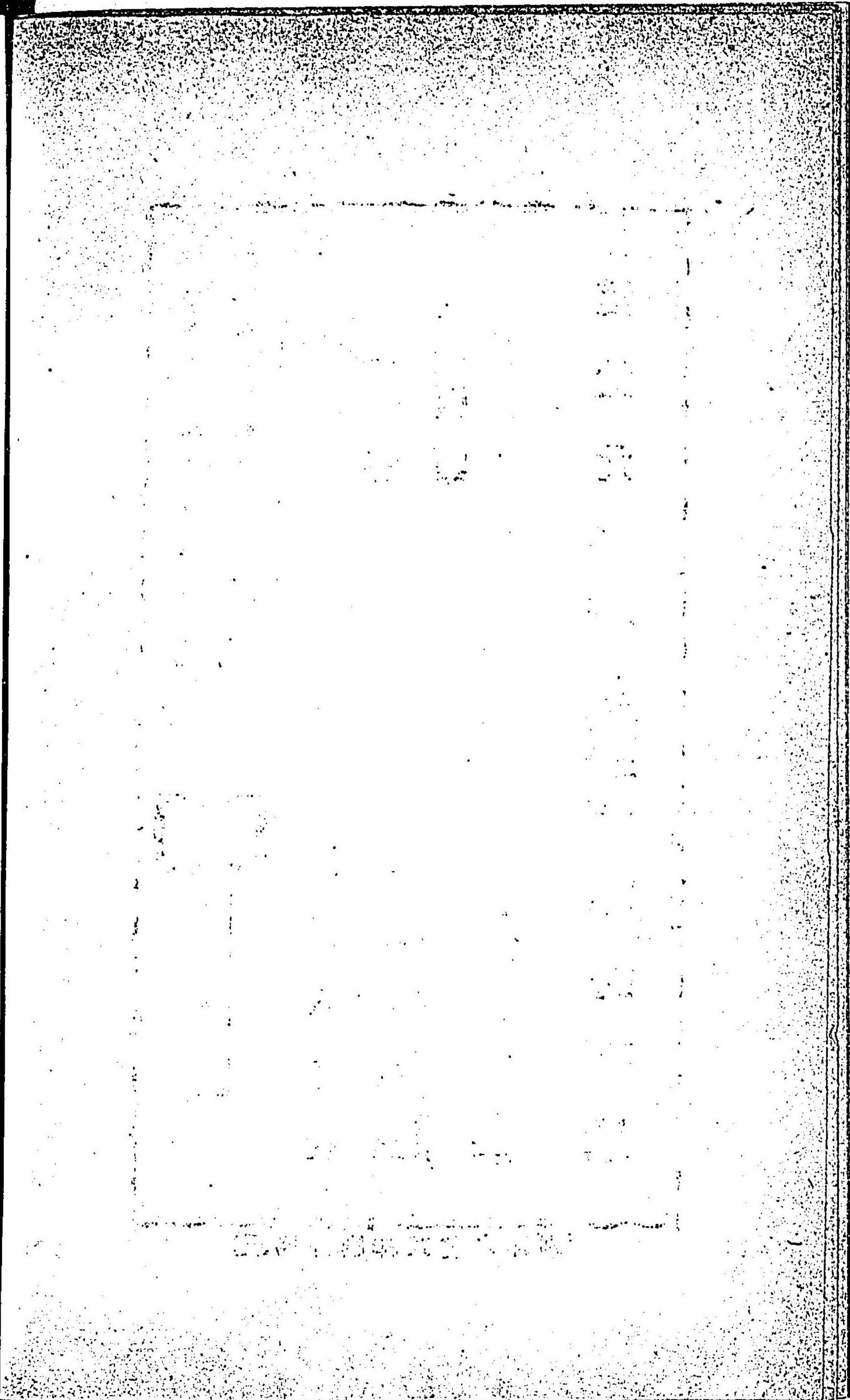
著 者 岡 田 八 千 代
發 行 者 水 野 慶 次 郎
印 刷 者 高 塚 慶 次
東京市日本橋區通油町十八番地
東京市京橋區弓町二十四番地

發 兌 元

東京市日本橋區通油町
(振替東京第三三三二番)

水野書店

(刷印社會式株刷印協三)



259
612

東京 水野書店發行